

日本人ジャーナリストが見た ボスニア・ヘルツェゴビナのいま

大塚敦子 フォトジャーナリスト

—はじめに

〈コミュニティ・ガーデニング・アソシエーション・オブ・ボスニア・アンド・ヘルツェゴビナ (Community Gardening Association of Bosnia and Herzegovina = 以下CGAと呼ぶ)〉を取材することになったきっかけは、2003年、アメリカのシカゴで行なわれたコミュニティ・ガーデンの国際会議に出席し、ダボリン・ブルダノビッチ氏の講演を聞いたことだった。それまで私がボスニアという国について持っていた知識・イメージは限られており、悲惨な民族紛争に引き裂かれた遠い東欧の国、という程度のものであった。それだけに、崩壊した多民族共生のコミュニティを再生するために、コミュニティ・ガーデンをつくって民族交流を進めているというダボリンの話には非常に感銘を受けた。そこで2004年、2005年と取材に出かけ、CGAの活動をつぶさに見ることになったのである。

—ボスニア・ヘルツェゴビナとはどんな国か

かつて旧ユーゴスラビア連邦を構成した6つの共和国のひとつだった。イタリアなどに近いバルカン半島にあり、九州と四国を合わせたくらいの面積で、人口は400万～450万人ほど。人口比率は、ボスニアク（戦前・戦中はモスLEM人と呼ばれていた）44%、セルビア人31%、クロアチア人17%、その他の少数民族8%で、どの民族も単一では過半数を占めない。ちなみに、ダボリンはクロアチア人で、今回日本に同行したヴァーニャ・ミヨビッチ氏はセルビア人である。2人とも首都サラエボ出身だが、戦争中はそれぞれの居住区に住み、敵味方に分かれていた。ダボリンは胸を、ヴァーニャは足を撃たれて負傷したが、その2人がいまではCGAのスタッフとして、ともに平和のために働いている。

——ボスニアでの戦争について

冷戦終結後、旧ユーゴ連邦の求心力が弱まるなかで、スロベニアとクロアチアが独立を宣言、連邦から離脱する。ボスニアも独立するかどうかで各民族が対立、モスLEM人、セルビア人、クロアチア人の3民族のあいだで領土分割戦争が起こった。1992年から1995年まで3年半にわたった戦争で、25万人以上が命を落とし、人口の半分にあたる200万人以上が家を失って難民になった。1995年11月の Dayton 合意により戦争は終結したが、この戦争がなぜ起こったのか、責任は誰にあるのか、各民族の主張が違うため、いまでも結論は出ていない。ハーグでの国際戦犯法廷も続いており、戦争の真実が明らかになるまでにはまだ時間がかかるだろう。

——現在のボスニア・ヘルツェゴビナ

伝統の赤い屋根が美しい町サラエボは、戦争中はセルビア軍に包囲され、兵糧攻めにあった。戦後11年目とあって、遠目からは戦争の傷跡は目立たないが、実際に町を歩いてみると、砲撃を受けて瓦礫となった建物があちこちにまだ残っているのを目にする。銃弾の痕が生々しく残るアパートなどにも人が住み、生活の営みを続けている。

ボスニア全土には300万ともいわれる地雷が、いまでも除去が追いつかないまま残されている。人びとの生活圏、農地などは優先的に除去作業が行なわれているが、山間地などは、地雷注意の看板を立てるだけでせいっぱいである。2010年に国際社会の援助による地雷除去作業が終了することになっているが、それまでに除去が終わる見通しはまったくなく、人びとはこれからも地雷とともに生きていかなければならないのが現実だ。

また、目に見える戦争の傷跡が消滅したあとでも、人の心に残った傷はなかなか消えないだろう。コミュニティ・ガーデンに来ていた子どもたちと粘土細工をしたとき、ある16歳の少年が作ったのは、なんと地雷を踏んで血に染まっている人の靴だった。戦争が終わったとき、この少年は6歳。彼の心に残ったものは何だったのか、あらためて戦争の残す傷の深さを考えさせられる。

戦後のボスニア・ヘルツェゴビナは、一つの国境の中に「ボスニアク（モスLEM人）とクロアチア人の連合国」と「スルプスカ共和国」（セルビア人の国）という二つの政体を抱える複雑な国家形態を取るようになった。行き来は自由であり、検問所があるわけでもないが、人びとの心の中には見えない境界線が引かれている。戦前のような多民族共生のコミュニティが崩壊し、いまでは民族ごとの住み分けが進んでいるため、普通に暮らしていたのでは同じ民族にしか出会わない。お互いの顔が見えない状況では、異なる民族のあいだに信頼を構築することはむ

ずかしく、紛争の火種がいまもくすぶり続けているのが現状である。

——コミュニティ・ガーデンの意味

このような状況のなかでつくられたコミュニティ・ガーデンでは、どの民族に属するかにかかわらず、人びとが安心して交流することができる。特に、戦中・戦後に生まれ、かつて多民族が共存していた時代を知らない子どもたちにとっては、異なる民族の子と出会い、友情を育むことのできる貴重な出会いの場となっている。

戦後のボスニアでは、さまざまな形での平和構築の試みが行なわれてきたが、このコミュニティ・ガーデンによる試みが成功している理由は、人びとの日々の生活に根ざしたものであるからだろう。たとえ何泊かのワークショップに参加したとしても、自分の生活の中に基盤がないものは、なかなか根付きにくい。自分たちの手で食べものを生産し、それを分かち合う、という人間の基本的な営みの中で行なわれるものだからこそ、有効な平和構築として成果を上げているのだと思う。

——いま、なぜ、日本で、ボスニアのコミュニティ・ガーデンの話をするのか

多くの日本人にとって、ボスニア・ヘルツェゴビナは、地理的にも心理的にも遠い国だ。民族紛争など自分たちには関わりのないことだと思っている人がほとんどだろう。その日本で、なぜ、いま、ボスニアの戦争とその後の平和構築の試みについて知ることが重要なのだろうか？

私自身も、ボスニアの戦争はあまりに複雑で、日本人にはわかりにくい、という印象を持っていた。だが、実際に現地に滞在し、人びとと同じ目線で暮らしながら学んだのは、どの国にも共通する普遍的な事実だった。それは、戦争というものは、誰かが仕掛け、敵意を煽らなければ始まらない、ということである。ボスニアでも、何年もかけて政治家やメディアがナショナリズムを煽り、徐々に他の民族への敵対心を育てていった。そして、「やらなければ、やられる」と人びとが思い込むように誘導していったのである。普通の人たちは、誰もほんとうに戦争になるとは思っていなかったのが、「気がついたら、戦争が始まっていた」という。誰かが引き金を引き、火をつけて回った結果、戦争が拡大していったのだった。

いまの日本でも、都会では人と人との関係が希薄になり、自分の住んでいるコミュニティのことさえ知らない人が増えている。それぞれが自分の殻に閉じこもるようになった結果、自分とライフスタイルや価値観の違う他者に対して不寛容になっているのが現状ではないか。相手の顔が見えないと、恐れや不信が増幅し

やすい。相手との共通点ではなく、違いばかりが気になり始めると、自分と異なる他者への攻撃・排除につながっていく。そんないまの日本の状況を見てみると、とてもボスニアの戦争を他人事とは思えないのである。

——所属集団ではなく、個人として交流すること

ボスニアのコミュニティ・ガーデンのような試みは、異なる民族の人びとが、所属する集団の一員としてではなく、個人として出会い、交流する場を創りだしているという点で非常に重要だ。平和は、人と人のつながりのなかから生まれるものだからだ。個人が名前を失い、集団としてひとくくりにはされるようになると、戦争の危険は増大するだろう。

サラエボのコミュニティ・ガーデンには、スレブレニツァの虐殺で夫を殺されたボスニアク（モスLEM人）の女性がいた。彼女の話で強く印象に残ったのは、夫を殺した相手を「彼ら」と複数で呼ばず、必ず「彼」と単数で呼んでいたことである。彼女はもちろん、夫を殺した下手人が誰かは知らない。だが、彼女は、「彼」という一人の架空の人間に怒りをぶつけることによって、セルビア人全体を憎むことを避けていたのではないかと私には思える。

ある集団への恐怖や不信を煽る動きに対して、一人一人の個人がいかにそれに抵抗し、相手を人として見つめ続けられるかどうかは、戦争を防ぐ一つの大切な鍵ではないだろうか。

——おわりに

コミュニティ・ガーデンは、お互いの顔の見える関係をつくることのできる大切な場である。その基本的なコンセプトとは、人と人を結びつけ、地域に根ざし、皆で分かちあうことだ。日本にも市民農園は各地にあるが、参加者それぞれがバラバラに野菜づくりをしているところが多く、まだ「コミュニティ・ガーデン」と呼べるまでには至っていない。もう一歩進めて、異なる人と人をも結びつける場として発展させていきたいものである。コミュニティ・ガーデンは、自分の身近なところから世界の平和へとつなげていく、大きな可能性を秘めたツールであるからだ。

《参考文献》

大塚敦子『平和の種をまく——ボスニアの少女エミナ』岩崎書店、2006年

[おおつか あつこ]